



神戸大学経済経営研究所

Research Institute for Economics & Business Administration of Kobe University

神戸大学経済経営研究所附属政策研究リエゾンセンター

企業情報分析資料室通信

January 2004 No. 3

CONTENTS

研究活動成果報告

(1) 公開講座

「経済・経営とイメージ・デザイナーイメージの政治経済学」2003年11月

都市計画・景観と経済・経営

正司 健一 経営学研究科教授

吉井 昌彦 経済学研究科教授

美術・色と経済・経営

宮下 規久朗 文学部助教授

天野 雅敏 経済学研究科教授

建築イメージと経済・経営

重村 力 工学部教授

澤 良雄 アトリエサワ主催

写真・船舶デザインと経済・経営

上野 継義 京都産業大教授

富田 昌宏 経済経営研究所教授

(2) 国際森林専門家会議 2003年11月

梶原 晃 経済経営研究所助教授

(3) 新たなデータベースの作成 (予定)

古証券データベース

非上場会社有価証券報告書データベース

■はじめに■

本『通信』シリーズを発行する理由の大きな一つに、企業情報分析資料室の所蔵する資料あるいはデータベースの収集・作成作業の意味を理解してもらうことにあります。No. 1の発行以来徐々に明確になりつつありますが、一見無造作に収集されているように見える我々資料室の資料やデータベースは、実は、情報公開によって大衆を説得する主体としての企業を総体として理解するためのものです。したがって、単一の資料収集に特化したことは、却って、企業の総体としての本質を見誤らせる危険があると考えます。バラバラなようであっても、実はその総体を見るからこそ企業分析であると考えます。多様な関係の中にあつてこそ企業は当該企業であるのであり、その多様な関係の中でどのような情報をどのような対象に発信していったかを理解する必要があるということです。

以上のような意図の下にリエゾンセンター企業情報分析資料室が作成中の企業情報データベースをより一般の人々に理解していただくための一環として、2003年11月にヴィジュアルなデータを用いた経済・経営問題の講義を8回連続した公開講座を行いました。今回の『通信』はまずその公開講座の概要を報告するとともに、環境問題に取り組む研究者の活動報告も続けて行います。

(山地 秀俊)

■研究活動成果報告(1)■

公開講座「経済・経営とイメージ・デザイン —イメージの政治経済学—」

公開講座の趣旨

企業や政府から提供される情報に基づいて、我々一般市民は将来を予測しながら生活していますが、提供される情報は、実は、数値や文字に限定されるものではありません。最も目に付きやすい図像やデザインもまたそうした組織から提供され、我々の生活に影響を与えているのです。そこで本年度の研究の公開講座は、最も数値情報に関係があると思われる経済経営領域で、いかに図像情報が多く提供され用いられて、我々の経済的意思決定にまで影響を与えているかを知っていただきたく、企画してみました。図像情報の影響力に驚き、講義で講師がお見せする具体的イメージ・デザインを楽しんでください。

11月 1日 土曜日 (13:30-16:50)

都市計画・景観と経済・経営

正司 健一 経営学部教授

吉井 昌彦 経済学部教授

11月 8日 土曜日 (13:30-16:50)

美術・色と経済・経営

宮下 規久朗 文学部助教授

天野 雅敏 経済学部教授

11月22日 土曜日 (13:30-16:50)

建築イメージと経済・経営

重村 力 工学部教授

澤 良雄 アトリエサワ 主催

11月29日 土曜日 (13:30-16:50)

写真・船舶デザインと経済・経営

上野 継義 京都産業大教授

富田 昌宏 経済経営研究所教授

公共交通とデザイン 正司健一

立て看板や無秩序に反乱する各種広告のおかげで、その街のイメージそのものが悪化しているケースがあることはいうまでもない。一方で無機質なまでに磨き上げられた空間に対して美しいと思うと同時に、冷たいとか、賑わい感がないと感じる人が多いのも事実である。そのような印象を持たれた街からは早晩活気が失せる可能性さえ存在する。だからといって、無秩序に多様な都市施設が整備されれば自然と活気もイメージもいい街ができるというものでもない。

ところで、いうまでもなく街にとって公共交通は重要な都市施設である。公共交通機関の下支えがなければ街は成立しない。そしてこのような交通手段としての機能面だけではなく、公共交通機関(車両だけではなく、通路、駅等)の存在そのものが人々にとって占める位置が小さくないだけに、公共交通機関がどのような形で街にとけ込んでいるか、光っているか、要するにデザインがどうかは大きな関心事である。公共交通の運営主体にとっても、人々に好まれる、そしてわかりやすい手段となることに、そのデザイン形成は大きなポイントとなることは言うまでもない。本講義ではこのような点を意識しながら、公共交通機関を中心に、そのデザイン性について多様な側面から、議論してみたい。講義では、たとえば下記のような例を中心にして、そのデザイン戦略、そしてその経済・経営的解釈について接近してみたい。

1. わかりやすさ、利用しやすさ、沿線イメージと鉄道(バス)デザイン
2. ストリート・ファニチャーの整備とPFI(Private Finance Initiative)
3. デザイン一新で市民の足の座を獲得したLRT(Light Rail Transit:ハイパー・トラム)

都市交通・景観と経済・経営

—ロシア・中・東欧の社会主義・市場経済関連で—

吉井 昌彦

1989年11月、「ベルリンの壁」開放により中・東欧諸国は雪崩を打ったように社会主義をやめ、民主化と市場経済移行を進めてきた。また、社会主義の総本山であったソ連も1991年12月には解体され、各国はそれぞれの道を歩んでいる。この講義では、これらの国の景観などのイメージを通して、歴史、社会、政

治, 経済などについて考えてみたい。

主な論点は次のようなものである。

1) 社会主義の総本山であったソ連(ロシア)の特性は都市景観などにどのように現れているのか, そして, これらが社会主義あるいは指導者の思想とどのように結びついているかをまず考えてみたい。

例えば, クレムリン宮殿内には「大砲の王様」と「鐘の王様」というものがある。また, 市内にはいくつかの壮大な高層建築がある。これらがロシアの国民性とどのように結びつき, そして現実に存在した社会主義システムにどのように結びついていったのかをお話してみたい。

2) また, ロシア以外のCIS(独立国家共同体)の景観などを加え, これらの国々が今後どのような道を歩んでいくのかを考えてみたい。

3) 他方, 中東欧諸国はどのようなのだろうか。この地域の多くの国は次のような共通する特徴を持つ。

- 自国の文化と伝統を持つ
- 他民族による支配を受けている
- ソ連の指導の下に社会主義を経験した
- 1990年代以降, 民主化, 市場経済化が進められ, 2004年5月には欧州連合(EU)に加盟する国もある。

このような点を中東欧のいくつかの国の景観等を素材に考えていきたい。一つだけ例を挙げておこう。ポーランドの首都ワルシャワに文化大宮殿という建物がある。これがなぜ作られ, ポーランド国民はこの建物をどのように見ているのかをお話することで, ポーランドの歴史の複雑さを理解していただきたいと思います。

美術と経済

宮下規久朗

美術作品は商品として取引されるかぎり, 経済と密接な関係にある。古来, 富のあるところに文化が栄えてきた。芸術活動が密室における芸術家の自足した営みでなく, 社会的な活動であるかぎり, それは必然的に経済に大きく左右される運命をもっている。

歴史的には, ルネサンスのメディチ家やローマ教皇, 近世のハプスブルク家から今世紀のアメリカやバブル期の日本にいたるまで, 経済的な発展が多く的美術家や美術品を集めるという現象が繰り返し見られる。ただ興味深いことに, 政治・経済の絶頂期よりも, むしろその衰退期に芸術の黄金時代が来るといふ現象も数多いのである。これは, 政治・経済活動に熱中している時期には文化を顧みる余裕がなく, 景気が退潮しはじめた頃にやっと趣味が洗練されて文化を重視するにいたるということであろうか。美術史的には13世紀の南宋, 16世紀のヴェネツィア共和国, 17世紀のスペイン, 18世紀のフランス, 18世紀の江戸などがその典型といつてよい。

今回は, 美術と経済がどのように関わってきたかについて考えるために, とくに20世紀のアメリカの例とバブル期の日

本を中心に見てみたい。また, こうした経済活動とは異質の社会主義体制では美術がどうなるかについて考えるため, アジア・アフリカや社会主義国の美術についてもこれと表裏をなすものとしてふれてみたい。以下, 箇条書きにトピックを挙げるが, こうした事例を豊富なスライドを交えてお話ししたい。

1 近世におけるコレクションの形成

- ・ 近世以前の王侯貴族の美術愛好…注文制作が主流
シピオーネ・ボルゲーゼ枢機卿ら「ニボテ」の美術保護
ハプスブルク帝国の美術収集
- ・ 動産としての美術作品の流通…壁画からタブローへ
市民のコレクションブーム(17世紀オランダ)
公共展覧会(サロン)・画商・評論家の誕生(19世紀フランス)
→前衛芸術家の育成 ex. 印象派におけるデュラン・リュエル画廊, ヴォラール
- ・ 個人美術館から公共美術館へ
フェデリーコ・ボロメオのアンブロジーアーナ美術館
フランス革命後のルーヴル美術館
ナポレオン美術館, リュクスンブル美術館

2 20世紀アメリカ

- ・ 第一次大戦後の富の蓄積
有力コレクターの増加…バーンズ, グッゲンハイム, スタイン, ガードナー
アドヴァイザー, 研究者(目利き)の養成…ベレンソン
個人美術館の成立と公共への美術品寄贈…美術館の増加
- ・ 亡命芸術家・文化人の役割
有力芸術家の移住…エルンスト, シャガール,
デュシャン, モンドリアン
ユダヤ系美術史家…パノフスキーらワールブルク学派
→美術の中心がヨーロッパからアメリカに
- ・ 近代美術館の成立
ニューヨーク近代美術館(MoMA)の成立
初代館長アルフレッド・バーによる近代美術の体系化・発展史観
企画展の開催による同時代美術の組織化
→ヨーロッパに対抗しうるアメリカの芸術の模索…抽象表現主義, ポップアート
- ・ 公共的な美術への支援(有望美術家を支えるシステム)
1930年代の連邦美術計画(WPA-FAP)→壁画運動
パブリックアート(公共芸術)…パーセント・プログラム
企業のメセナ活動 ex. チェイス・マンハッタン銀行,
フィリップ・モリス社
国際大型展覧会の開催→各国のビエンナーレ

3 戦後日本の軌跡

- ・ 戦後「美術ブーム」の仕組み
デパートと新聞社の共催
美術全集の普及
- ・ 箱もの行政…公立美術館の増加
文化財保存(ルーヴル型)の国立博物館3館と国立西洋美術館

企画重視(MoMA型)の自治体による近代美術館の林立
→中味(企画・学芸員)の軽視

- ・ 目利きなき収集
バブル期における企業の投機的収集
美術史教育の欠如・専門家軽視による不当な購入と散財
- ・ 市場・美術界の貧弱さ
美術家の貧困,美術館の窮状,メセナの頓挫
ビエンナーレの開催(横浜 越後妻有),パブリックアート

4 美術後進国の事例

- ・ アジア・アフリカ
20世紀における西洋のプリミティヴィズムの発見→民俗芸術への評価と自覚
現代美術の主流に…国際大規模展覧会への参加 ex. 福岡アジア美術館
- ・ 中国・ロシア
文革後・ソ連崩壊後に社会主義リアリズムから脱却→現代美術の最先端への飛躍
- ・ 北朝鮮
社会主義リアリズムへの固執…金親子礼賛の単一的主題

(主要参考文献)

糸井恵『消えた名画を探して』時事通信社, 2001年。
ジョセフ・L・サックス, 都留重人監訳『「レンブラント」でダートツ遊びとは: 文化的遺産と公の権利』岩波書店, 2001年。
高階秀爾『芸術のパトロンたち』岩波新書, 1997年。
F.Haskel, Patrons and Painters: Art and Society in Baroque Italy, New Haven & London, 1980。
『西洋美術研究 特集 アート・コレクション』8, 三元社, 2002年。

日本の藍とその美学 —社会経済史の視点から— 天野雅敏

1

藍色は、青より濃く、紺より淡い色のことを言います。布を藍の染料に浸す回数によって幅広い色合いが作り出されます。江戸時代には、藍染めの色合いを表わす多くの言葉が生れました。染料の藍瓶に布を通しただけの薄い青である「瓶のぞき」をはじめ、30回ほど布を藍に浸し、ほとんど黒に近い色をつける「止紺」など多くの表現があります。このようにさまざまな藍の呼称があることから、日本人が深く藍にかかわってきたことがうかがえます。人びとは、何の変哲もない麻の着物よりも、藍で染めた木綿の着物を身につける方を好むようになりました。縞模様、紺、型染め、絞りなど、模様としては手の込んだ時間のかかるものが幾種類となく工夫され、藍で染められたのです。

江戸時代には、国産の綿花栽培が普及し、木綿生産の急増をみて、麻から木綿への衣料革命が進みました。それに

ともない、その青藍色染料としての藍に対する需要が急増し、阿波国の吉野川下流域一帯がその一大産地となりました。「人は藍と言へば阿波を思ひ、阿波と言へば藍を思ふ程、我が阿波藍は其の量に於ても質に於ても、他国藍に対して優位を占め以て明治に及んだ」(西野嘉右衛門編『阿波藍沿革史』, 思文閣, 昭和46年復刻, 5頁)とされています。そこで、ここでは、阿波藍をまずとりあげ、ついで他国藍のなかから武州藍、尾州藍をとりあげ、それらの成長過程をみることにします。そして、浮世絵を素材にして、19世紀の藍染めの普及について検討し、その文化史的意義について言及したいと思います。

2

阿波藍の起源は15世紀前半よりまえにさかのぼりうると言われていますが、特産物としての阿波藍の急速な成長・発展がみられたのは、徳川中期以降のことと考えられます。17世紀中葉の阿波藍の作付面積は数百町歩ほどでした。しかし、18世紀にはいると、藍作は吉野川筋を席捲し、1740(元文5)年の調査によれば、吉野川筋の7郡333ヶ村のうち約7割の237ヶ村の村むらでその作付がみられ、作付面積は3000町歩を数えていました。藍作は18世紀後半を通じてさらに拡大し、1800(寛政12)年には6500町歩の作付をみえています。そして、幕末期の作付面積は、天保末年に8000町歩を超えるピークを記録しつつ、7000町歩前後の水準で推移し、明治期にはいると10000町歩を超えています。このような阿波藍の成長にしたがって、在地の資本蓄積が進みました。阿波藍業のにない手は、大別すると、寝床と称する生産設備を所有して、葉藍から藍玉を製造し、マーケティングをになう藍師・藍商と、藍玉の原料の葉藍を生産する藍作人＝葉藍生産者農民からなっています。事例として、吉野川下流域の板野郡中喜来浦の関東売藍商であった三木与吉郎家と幕末・維新期に台頭した同郡奥野村の藍商奥村嘉蔵家を取りあげ、その決算簿を分析しますと、19世紀の純資産の増加が検出できます。幕末・明治前期の阿波藍業は、とりわけ後発藍商や中小藍師層の進出によってになわれていたといえるでしょう。

19世紀にはいると、他国藍の成長も進みました。関東では、高機を導入によって、足利、佐野、蕨、川越、所沢などの綿業産地が形成され、それにともない、地藍生産が成長し、地廻り産の比重が増大したと考えられます。葛飾郡西大輪村の白石家や榛沢郡下手計村の栗田家の事例をみると、文化期以降武州藍の成長がみられたことがうかがえます。濃尾地方でも、先進地からの技術の伝播により、織物生産が発展し、それにともない、地藍生産の成長がみられました。19世紀にはいると、尾張藩は、藍の生産の奨励と統制をはかろうとしていますし、尾州藍は江戸市場にも送荷されていました。そして、尾西地方における織物生産の発展にともない、農村の紺屋の広範な簇出があったものと思われる。

3

阿波藍、武州藍、尾州藍を事例にして、近世の藍業の発展をみてきましたが、つぎに、当時の社会における藍染めの普及度について検討をくわえます。安藤広重の「東海道五

拾三次」には、街道の上に繰り広げられる大名行列から渡し場で漕一つで働く男達まで、いろいろな社会層の様が描かれており、一枚一枚の絵の中には当時の衣類を身に付け生き生きと生活する人びとが描かれています。「五拾三次」の街道に繰り広げられる人間模様の情報量は膨大なものであり、かろうじて確認できた人を含め登場人物は953人を数え、衣類の色や種類を判別できた人は642人に上りました。この642人の衣類の総点数のうち藍染めを利用している衣類の比重は約4割ほどでした。この数字は小さなものとは言えないでしょう。

18世紀後半以降江戸地廻り経済が発展し、江戸では下り物への依存度が低下していったが、これは、「天下の台所」として経済的優位性を恣にしてきた大坂経済に陰りが見えてきたということでもありました。こうしたことを背景にして、おしゃれの流行の主導権も江戸に移りました。江戸好みのおしゃれは、さっぱりとあかぬけた「いき」で「いなせ」な装いでした。1930(昭和5)年に『「いき」の構造』を発表した哲学者九鬼周造は、「いき」とみなされる表現に言及し、色彩については、鼠色、茶色、青色の三系統のいずれかに属するものが「いき」であるとしています。近世後期には、綿服の普及とともに、ことさら地味な藍一色に傾いていきましたが、それが実は「いき」な色とされていたのです。思えば、藍は恬淡で渋く、味わい深い色です。豪華や華美を去り、哀愁と“諦め”がただよう色でもあります。「いき」とは、そうした渋さと哀愁、そして一種の諦めの境地から生まれた江戸気質であったのです。

(参考文献)

天野雅敏『阿波藍経済史研究—近代移行期の産業と経済発展—』、吉川弘文館、1986(昭和61)年。

天野雅敏・平岡ひさよ「近世の藍と藍染めの普及」、日本藍染文化協会編『日本の藍—伝承と創造』、日本放送出版協会、2002(平成14)年所収、38—52頁。

稲垣史生「粋のファッションと風俗」、切畑健編著『きものと文様 デザインを着る 日本の美と文化第16巻』、講談社、1983(昭和58)年所収、134—137頁。

小沢詠美子著『お江戸の経済事情』、東京堂出版、2002(平成14)年、98—106頁を参照。

建築イメージとそのメッセージ 重村 力

1 オフィスビルの形の変遷

*御堂筋・土佐堀端や丸の内・お濠端の百尺規制

その時代のビル1920~1940(旧丸ビル、大阪ガス・大ビル・住友ビル)

*コア方式のビルの登場1950~1960

旧東京都庁舎・パレスサイドビル・神戸市役所旧棟

*国連ビル型への転換1950~1970 パンナムビル・ピレリビル・霞ヶ関ビル

*塔状ビルへの帰結 シーグラムビル1958 新宿三井ビル・サンシャインビル・

貿易センタービル1976 その攻撃対象としてのイメージ2001・09・11

2 なぜ塔に帰結したか?

二つの筋道。

1) オフィスビル機能の論理的帰結・情報交通手段の発達

2) イメージの獲得:マンハッタン摩天楼競争1930

クライスラービル、エンパイアーステートビル、

香港の80年代香港上海銀行以降一、

遅れてきた上海1930と1990の合奏

3 環境造形の三つの性格

環境をどうとらえるか?

フランス語での環境の表現 Milieu? Environnement?

中心か周縁か?

閉所恐怖症と広場恐怖症、自己保存本能、自己発展本能

何か手がかりに頼って中心起点を求めるか、何か庇護する囲いやくぼみに落ち着くか。

建築造形の三つの性格

1) 外側に向かって訴える

2) 内部世界を創り出す

3) 内外の世界を交流させる。

1) の類型の代表 塔、門、ピラミッド

塔とは何か? 古今東西のオペリスク、尖塔、鐘楼、

ミナレット、ストゥーパ(仏塔)

門とは何か? 鳥居 凱旋門 朱雀門 南大門

ピラミッドとは何か? ピラミッド、故宮、ヴェルサイユ

塔の意味するもの:位置を示す、どこからでも見える、

天に向かう

2) の類型の代表 城壁都市 ドーム 曼陀羅

城壁:その内と外

ドーム・天蓋:その内の世界体験:神の世界の表現

:十字を球で覆う:幾何学紋様で世界をつくる:光を誘う

曼陀羅:省略

3) の類型の代表 広場 回廊 入れ子構造

商業的都市空間の原型の成立

広場:その基本的性格・アゴラとストアは対立物か?

泉・交通の節・市・芸能・信仰・祭祀・合議機能の複合'

サンマルコ広場の見事な構造

回廊の発達:ガレリア・ビットリオ・エマニュエレ(ミラノのガレリア)の先駆性

ブリュッセルの広場におけるガラスのファサードの17世紀の実現

4 都市のイメージの共有

ケビン・リンチのいうイメージアビリティについて

どのようなイメージが共有されやすいか?

建築イメージと経済・経営 澤 良雄

経済 量 瞬発的時間(現代性) 客観的 文明 若者 鮮明
建築 質 持続する時間(時代性) 主観的 文化 老人 風合い

職業
プロフェッショナル・サービスとは、
ビジネスとは、
では、建築家はどうか。資金の裏付けがなければ設計依頼が来るはずはない。しかし風土や習慣の表出としてその形やデザインを考えたとき、底に流れている文化の時代性に行き着く。

伝統的日本文化の発生
室町時代は、南北朝の戦乱のなかに生れて、やがて足利幕府は戦国の業火のなかに滅びた。
「応仁の乱」(1467～1477)
足利幕府は200年(1333～1573)
「生け花」も「茶の湯」も「連歌」も「水墨画」も、「能」や「狂言」もこの時代の産物
「座敷」と「床の間」を生み出し、「庭」を完成
『太平記』が編まれ『徒然草』が書かれた
禅の思想が深く日本人の美的な感覚に結びついた
日明貿易を通じて、現在の骨董趣味の原型が完成
日本が初めて西洋世界に開かれた

都市文化の芽生え
北条家の鎌倉幕府、徳川家の江戸幕府 関東の地
本来は関東出身の足利家が、幕府を京都室町に開いた
日本に初めて真の「都市文化」を成立させた
室町幕府の放漫な経済政策が、裕福な新興商人を育てあげ、富の社会的な蓄積をうながす
地方で力を蓄えた有力な武士が上京し、それに庇護された禅宗寺院が繁栄し、いずれも高度の芸術や文学に安住の場所を提供する
商業の発展が町々に盛り場をつくり出し、流浪の芸人たちを都会に招き寄せた
水墨画の雪舟、茶の湯の村田珠光は僧堂の出身
「小笠原流」作法の小笠原真宗は武士の生れ
能の観世親子は伊賀の地侍に縁を持つ旅芸人
150年の鎌倉時代は意外に文化的な産物に恵まれていないし、江戸幕府も江戸の土地に独自の文化を育てるためには、ほぼ150年の歳月を費やしている。
海に開かれた時代
平安朝の遣唐使、平清盛の対宋貿易、足利義満は新興の明国とのあいだに正式貿易の道を開く
鎌倉幕府、江戸幕府がともに海外に閉鎖的であったのに較べて、秀吉を含めて京都の政権がいずれも海に向かって開かれていた。
活発な海外進出をうながしたものは、室町幕府の政治的な弱体

福祉資本主義のまなざしを読む
—企業イメージのマネジメント—

上野継義

知ってのとおり、写真が清廉潔白で嘘をつかないという絶対的な信頼は、しばしば激しく揺らいでいます。それという

うのも、写真は嘘をつかないかも知れませんが、嘘吐きが
写真を撮るからです。 — ルイス・ハイン

20世紀初頭に米国の大企業で印刷されるようになった社内報や安全月報のページを繰ってみると、そこにおびただしい量の写真が掲載されていることに気づく。社内誌について批判的に考察したある論説によれば、これらのおびただしい量のスナップ写真やそれに付随する社内ゴシップ記事は、従業員の関心をつなぎ止めておくための工夫であり、彼らにもっと肝心な話を聴いてもらうための仕掛け(devices) に他ならないという。そのような仕掛けは多岐にわたる。たとえば、「ある編集者から聞いた話では、理想的な社内誌は、年に2千人の名前を活字にするのを目標にしており、そうすれば事実上すべての従業員が少なくとも12ヶ月に一度は自分の名前を紙面に見出すだろう。」また、社内報が従業員のオーヴァー・コートのポケットサイズになっているのは、それを確実に家庭へ届けてもらうためなのであり、すると妻は料理のレシピやファッション記事を切り抜き、子どもたちは紙面を飾っている製品を買ってみたいくなり、ゆくゆくは次世代の従業員として会社の雇用事務所のドアをたたくことになるという。

こうしてひとたび従業員とその家族の関心をつなぎとめたなら、編集者は、従業員のための生活様式の提言とか性格形成といった、もっと肝心な(serious) 題目に話をすすめるだろう。つまり従業員は工場の近くに家庭を構え、自動車を持ち、あるいは会社の株式を買って、庭の手入れをし、貯金をはじめめるべきだ。昇進をめざして張り合うべきだが、たとえそれに失敗しても、四半世紀にわたって同じ職場でこつこつと誠実に働くことに満ち足りた喜びを感じるべきだ。

つまり社内報や安全月報に掲載されている写真は、雑誌編集者(したがってまた経営者)の思いに即していえば、福祉資本主義(welfare capitalism) の実態に関する「目に見える証拠」として提出されているのだ。

だから記事の内容も写真の被写体も企業内のできごとに限られている。こころみにインタナショナル・ハーヴェスター社が1909年に創刊した『ハーヴェスター・ワールド』という従業員向けの月刊誌を開いてみよう。上質紙を使った30ページくらいのこの冊子は、最初の方の号で、経営陣の肖像写真のほか、クラブハウスのいささか殺風景な(というのは人が映っていないから)館内紹介の写真や事故防止活動の具体例、工場での作業風景の映像を載せている。そのほかにカンパニー・ドクターによる産業衛生に関する講話、農機具製造に関する講義概要、従業員からの提案の紹介記事などが盛りこまれ、最終ページは、従業員共済組合の会計出納記録で締めくくられている。他企業の社内誌もほぼ似たり寄ったりで、ある研究が指摘しているとおり、いずれも会社をひとつのコミュニティに見立てていた。会社という閉じられたコミュニティのなかで、「労働者たちは休暇をとり、スポーツ・チームに参加して、年金制度に出資し合い、結婚して、ダンスして、クリスマスを祝い、家庭の必需品を売り買いして、バラエティに富んだ夜間授業を聴講する。」

もとより社内誌の記事や写真が閉じられた世界の出来事だからといって、編集者(つまり福祉資本主義の担い手)のまなざしまでが内向きだというわけではない。この講義では、社内誌に掲載された写真を実際に眺めて福祉資本主義のまなざしを読み解いてみよう。いったい大企業経営者たちはどのような眼で労働者を見ていたのか？ また労働者たちの何を見ようとしていたのか？あるいは一連の労務政策を通じて会社の将来をどのように夢見ていたのか？これらの問に答える上で留意しておくべきことは、ほぼ19世紀末葉から20世紀初頭の「革新主義時代」に、企業イメージの管理という職能の性格が大きく変化したことである。そもそも企業イメージは、企業が実際にやっていることよりも、それを一般公衆がどのように見ているのかにむしろ左右されると云ってよい。植民地時代から成功した商人はそのことをよくわきまえていて、大衆を「自分たちのサイドに」引き寄せておくコツを心得ていた。しかし世紀転換期に現れた巨大企業のイメージを管理する仕事は従来とは性格を異にし、専門家の援助なしには、もはやその十全な遂行が出来ないという事態に立ち至ったのである。写真の複製技術の発達と大衆視聴者層の成立がこうした事情と密接な関係を有していたのはいうまでもあるまい。それゆえ社内誌における写真利用という現象を、イメージ管理の専門職業化という流れのなかに位置づけるならば、革新主義時代に起きた大きな社会変化の特徴をも見通すことができるであろう。

船舶にみるイメージ・デザイン 富田昌宏

- I はじめに
蒸気船の出現
客船・貨客船を中心に
- II イメージの形成とデザイン
 - 1. 蒸気船の帆装
蒸気船の普及過程
安心感の醸成
燃料の節約
帆装の終焉
 - 2. 煙突
蒸気船のシンボル
スピードの象徴
ディーゼル船の登場
航空機の垂直尾翼
- III イメージからの脱却とデザイン
 - 1. 定期客船からクルーズ船へ
第1世代クルーズ船(1960年代後半～)
第2世代クルーズ船(1990年代末～)
 - 2. 現在のクルーズ船
大型化 パナマックス呪縛からの開放

新技術 アジポッド
大衆クルーズ

IV 今後の展望

■研究活動成果報告(2)■

国際森林専門家会議

梶原 晃

持続可能な伐採活動についての提言を採択

2003年11月21日に千葉県の本更津市で「アジア森林パートナーシップ(AFP)第3回実施促進会合」が開催されたことにあわせ、11月17日から20日まで、本更津市のかずさアカデミアホールなどで国際森林専門家会議「国別伐採実施規範の策定と実施」が開催され、本リエゾンセンター梶原晃助教授が出席しました。

日本はこれまで開発途上国の自助努力に対する支援を通じて、森林減少・劣化対策を含む地球規模での持続可能な開発の実現を目指してきました。具体的には、97年6月の国連環境開発特別総会(UNGASS)において発表した「21世紀に向けた環境開発支援構想」(ISD)に基づいて、開発途上国における森林の減少・劣化問題に対処し、それらの国で持続可能な森林経営を推進するため、二国間の技術協力や資金協力、国際機関への資金拠出等援助を実施してきました。さらに、2002年8-9月の「持続可能な開発に関する世界首脳会議(ヨハネスブルグ・サミット)」を機会に「持続可能な開発のための環境保全イニシアティブ」(EcoISD)を発表し、今後はEcoISDに基づいて協力を実施していくとしています。なお、EcoISDの行動計画にはアジア森林パートナーシップ(AFP)の推進を図ることが含まれています。

本更津市で開催された今回の会議では、アジアの開発途上国で違法伐採などの不適切な伐採の改善が緊急課題となっている中で、各国の事情に応じた国別伐採実施規範の策定とその効果的な実施のために解決すべき課題の検討を行いました。16か国、5国際機関の代表者や、内外の研究機関、NGO、森林・林業関係機関から計約150名が参加しました。会議は各国・機関の代表者から持続可能な伐採を進めるための取組について事例発表が行われたほか、適切な伐採実施規範の策定・実施に向けた課題やその対応策についてグループ討議が行われました。

また20日午後に開催された全体会議では、このグループ討議の結果を踏まえ、持続可能な伐採活動の効果的な定着・推進を図るための提言などを盛り込んだ「概要報告書」を採択し、参加各国の森林政策の指針として活用することになりました。

■ 研究活動成果報告(3) ■

新しいデータベースの作成(予定)

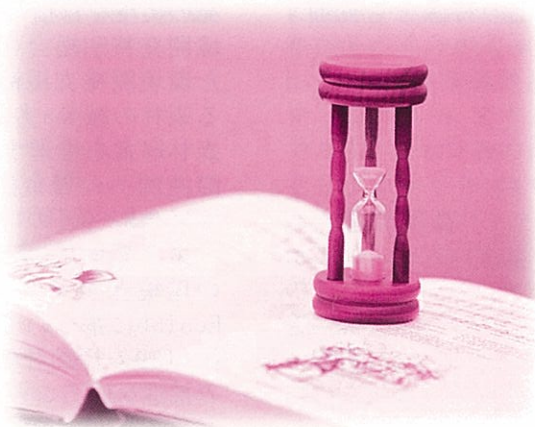
企業情報分析資料室では、新たに2つのデータベースを作成中です。一つは東京証券取引所に収集・所蔵されていた古証券のイメージ・データベースです。欧米では昨今、古い株券や社債等の証券デザインに着目した研究(scripophily)がなされており、証券のデザインと当時の会社の経営理念との関係が、そのテーマです。また欧米の古証券はそのデザインが秀逸で、投機の対象にもなっているほどです。我々分析資料室では、これまで『通信』でも述べてきたように、企業が行う情報公開行為の一環としての証券デザインという位置づけで、日本の古証券のデータベースを作成することにしており、企業の情報公開行為を総体として捉えるときの

一助になることを期待しております。勿論、証券が発行された各時代の利子率の証として、また古証券の表に加えて裏のデータもイメージ化しておりますので裏書情報等の調査対象として利用可能です。

また、もう一つのデータベースは、あくまでも仮のものですが、分析資料室が所蔵する膨大な有価証券報告書の中の、非上場会社の有価証券報告書(フィルム形態で所蔵)を、フィルムの劣化問題等も考えてデジタル化する計画の一環として作成するものです。

いずれのデータベースもまだ完全なものにはなっておりませんが、『通信』の次号以降で、より詳細に解説したいと考えております。

(山地秀俊)



神戸大学経済経営研究所附属政策研究リエゾンセンター
企業情報分析資料室通信 第3号

2004年2月10日発行

編集 神戸大学経済経営研究所
附属政策研究リエゾンセンター
企業情報分析資料室

発行 神戸大学経済経営研究所
〒657-0825 神戸市灘区六甲台町2-1
E-Mail gaibu@rieb.kobe-u.ac.jp

